



Title	ケース・スタディ・ハウス・プログラムにおけるクレイグ・エルウッドの空間像：ケース・スタディ・ハウスにみるライフスタイルと空間表象に関する研究（その2）
Author(s)	末包, 伸吾; 増岡, 亮
Citation	デザイン理論. 2015, 65, p. 31-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56281
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ケース・スタディ・ハウス・プログラムにおけるクレイグ・エルウッドの空間像

— ケース・スタディ・ハウスにみるライフスタイルと空間表象に関する研究 (その2)—

末 包 伸 吾
増 岡 亮

キーワード

クレイグ・エルウッド, ケース・スタディ・ハウス, 規格化, 空間像

Craig Ellwood, Case Study House, Standardization, Image of Space

1. 研究の背景, 対象と目的
2. エルウッドのCSH作品のパス表現とその傾向
3. エルウッドのCSH作品に関する概念構成とその内容
4. CSH作品のパスにみるエルウッドの空間像
5. 小結

1. 研究の背景, 対象と目的

本稿は、規格化を基調としながら「新しい」ライフスタイルとその空間を、空間像として提示する試みであるケース・スタディ・ハウス・プログラム（以下、CSHP）¹における、個々の建築家の空間像を析出する試みの第2報である。CSHPの空間像に着目する意義は第1報²で示した。本稿の分析対象は、CSHPの第3世代を画す建築家の一人でCSHのイコン的作品群CSH#16（1952-53）（以下、#16e³）、#17e（1954-55）、#18e（1956-58）を設計したクレイグ・エルウッド（1910-1992⁴）である。CSHの代表的な3作品を輩出しただけに、彼には様々な観点から既往研究があるが、それらはCSHPの作品の一つとして評価⁵されるものが大半である。従って、エルウッドの言説、空間像の表現としてのパス、実際の空間の3相のもと、すなわちプロセスとしての建築空間の生成の下に#16e～#18eの特質をみる着想はない。本稿の方法は、後に比較を行う構想もあることから第1報に準じる。本稿では、#16e～#18eについて、彼の言説と実現した空間おのおのの分析を、パス表現の分析との相互関係のもとに、その特質が空間像としていかに表出されていたのかを把握することを目的とする。具体的には、①雑誌「Arts and Architecture（以下、A&A）」に掲載された#16e～#18eの全パスの表現から彼が重視していた視点を抽出し、②#16e～#18eに関する全言説から、彼のラ

本稿は218回研究例会（2014年5月17日、於：成安造形大学）での発表に基づく。

イフスタイルや空間に関する概念を抽出する。③パースと言説の比較、パースと竣工写真の比較、個々のパースの構図の比較を通し、エルウッドの空間像の特性を明らかにする。

2. エルウッドのCSH作品のパース表現とその傾向

筆者が収集した約30年間にわたるA&A⁶を原資料に、エルウッドのCSHP作品のパースを抽出すると、#16eが5枚、#17eが8枚、#18eが4枚（うち3枚は同一、以下では2枚として扱う）の計17枚であった（図1）。それぞれのパースの自体の表現の特質とともに、①建築的表現、②生活環境的表現、③周辺環境の表現の3点から分類し、その結果を表1に整理した。以下では、この表に基づき、各パースの表現の傾向をみる。

#16eでは外観は3枚と内観は2枚、消点は4枚が1消点を採用し、視点の高さも目線の高さのものが4枚となっている。対象はアプローチから、リビング、ベッドルーム、キッチンと

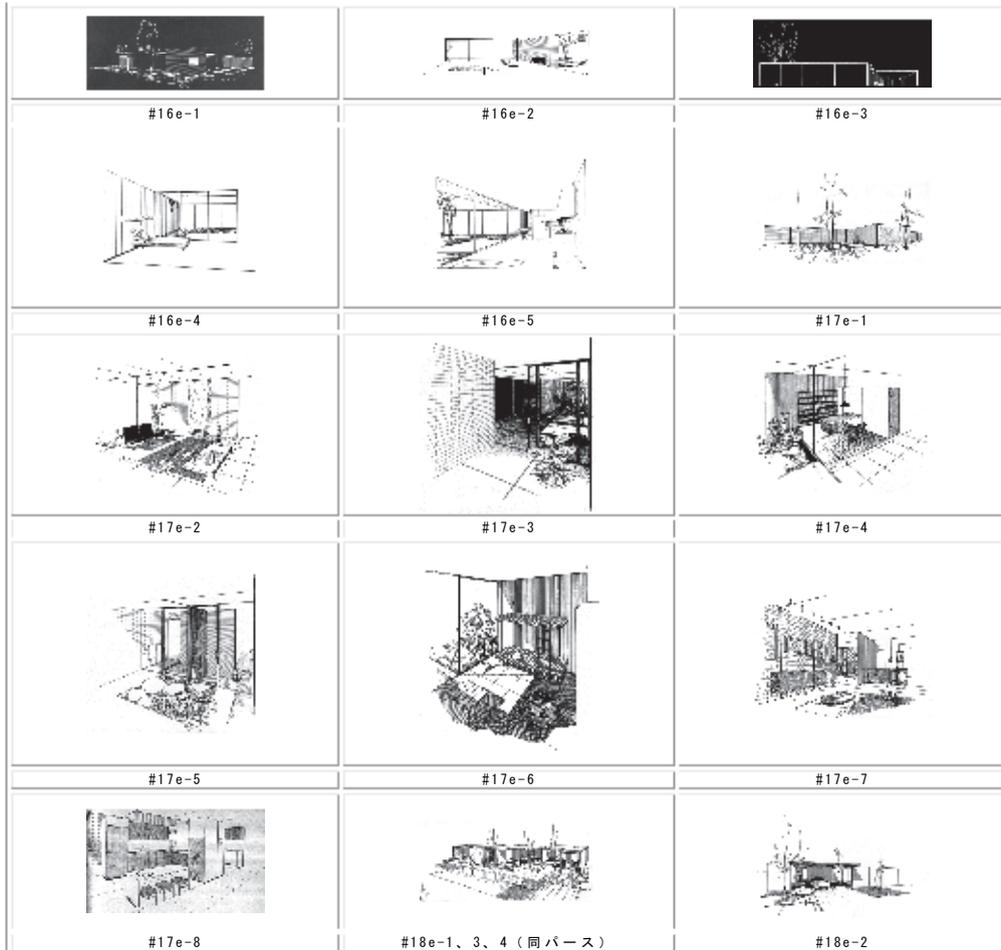


図1 A&A誌掲載のCHS#16e、#17e、#18eの全パース

フォルニアにおける地震など、地域の特性への対応（#18e-19）」などと述べ、地域性への配慮とプレファブリケーションを重ね合わそうとしていることは注視に値しよう。それは〈スチール〉の採用に至る彼の言説にも現れる。スチールによる軽量化や施工の簡略性などの建設の容易さといった点への言及にとどまらない。彼はスチールについて、先述した壁と切り離された架構としての美しさを現すものであるとともに、「スチールが最も実理的な解決であり……地域の特性をふまえている（#18e-16）」という地域の特性をふまえたものという2点を重視し、彼の住宅群、ひいては彼の作品全体へのスチールの採用の大きな要因とするのである。エルウッドの地域の特性への配慮は、同等の数の言及がなされた〈植栽〉において、「(植栽)は全てカリフォルニアの気候に応じて選択される（#17e-27）」ことから、彼は建築だけでなく彼が創出する空間全体において、地域の特性を重視していたことが認められよう。

4. CSH 作品のパスにみるエルウッドの空間像

ライフスタイルとその空間の理想像を示す空間像の把握について、より詳細な検討を行なうため、CSHP に関わるパス全体155点の中から、2章で検討したパス表現の傾向からみちびいた、建築家の独自性が表現されていると考えられるパス21点を抽出した。その結果、エルウッドの作品としては #16e の4点（図1の #16e-1～4）が抽出された。その上で、言説とパス、パスと竣工写真、パスの構図をそれぞれ比較検討することにより、エルウッドの空間像を明らかにする。

4. 1 言説とパス

本節では言説で述べられている内容が、#16e の4点のパスにどのように反映されているかをみる。ここではまず、言説がパスに「反映されている」、「部分的に反映されている」、「反映が確認できない」、の3段階で分類した（表3）。

これによると全体としてなんらかの反映（「反映されている」と「一部反映されている」）が認められるのは、全体の言説数の1／4であり、CSHP 全体での反映度が約5割であったことを考えると、エルウッドの場合は低い割合となっている。その中で「反映されている」のは、

表3 CSH#16e への言説のパス表現への反映（数字は言説番号）

パスNo.	工業技術への意識				生活環境への意識				居住環境への意識				空間構成				空間概念															
	構造設計 計画	断熱 断熱性能	断熱性能 断熱性能																													
#16e-1	32	4	0	21	9	24	2	7	12	13	14	22	1	32	18	23	31	3	6	26	35	17	25	19	18	25	27	0	18	5	11	10
#16e-2	32	4	0	21	9	24	2	7	12	13	14	22	1	32	18	23	31	3	6	26	35	17	25	19	18	25	27	0	18	5	11	10
#16e-3	32	4	0	21	9	24	2	7	12	13	14	22	1	32	18	23	31	3	6	26	35	17	25	19	18	25	27	0	18	5	11	10
#16e-4	32	4	0	21	9	24	2	7	12	13	14	22	1	32	18	23	31	3	6	26	35	17	25	19	18	25	27	0	18	5	11	10

■ パスに反映されている □ パスに部分的に反映されている □ パスに全く反映が確認できない

【生活環境】において1/3と最も高い割合を示し、【工業技術】に関しては約1割に、【周辺環境】についてはその半分にとどまる。特に#16eについて、言及が最も多かった〈スチール（4言説）〉については、パースへの表現としての反映が乏しく、また3言説が認められたものうち、〈壁・パネル〉と《プライバシー》に関してはパースに反映されているものの、《眺望》や《外部空間》、《空間の拡がり》については、ほとんど反映されていないことが認められた。ここでの検討により〈壁・パネル〉とそれに伴う《プライバシー》が、彼の本作品で最も重視した空間要素であることが確認できる。言説ごとに、パースでの反についてより詳細にみると、《構成部材》のみが、4つのパース全てにおいて「部分的に反映」であれ反映されていること、さらに〈植栽〉についても3つのパースで「部分的に反映」しているという傾向は、2章のパースの分析において、#16eのパースは建築的表現および植栽などの建築周辺の建築的操作が可能なのが強調された事例にあたることを示したが、このことが言説の数とパースへの反映の相関としても示されている。

以上の検討から次の4点が導かれた。まず、エルウッドのパースに示された空間像は、建築的表現を中心とするもので、言説全体の傾向との相関は必ずしも高くない。ついで、〈壁・パネル〉に関する言説のパースへの高い反映度は、素材感の抽象化された表現、内外へと連続する壁のみを強調した表現、外部を抽象化した表現をとっていることなどから、内部から外部への空間的拡がりを主として表現しようとしたものといえよう。これは一方で《プライバシー》に関する言説のパースへの高い反映度とも関係する。#16eの構成要素として最も特徴的なものが、敷地境界に沿って設けられた半透明のパネルである。このパネルで住宅のプライバシーを確保し、外観パースとしては内部空間を一切表現されていない。すなわち、架構による秩序だった空間を、立面的なパースによる均等な柱の感覚で表現しているのである。最後に【周辺環境】に関する言説への反映度の低さは、同時にパースでも、敷地内の植栽を重点的に描写し、周辺環境の表現がなされないことにも顕著に現れている。

4. 2 パースと竣工写真

本節では、エルウッドのパースと竣工写真との比較を通じて、パースと実際に空間化された建築との差異を、強調、消失、抽象化、その他の変更、に分類し、彼のパースにおける空間像を明らかにする（図2、表4）。

まず、個々のパースごとにその傾向をみる。

#16e-1におけるパースと竣工写真とを比較すると、パースでは強調されている要素はなく、サッシュや家具、室内表現、周辺環境らが消去されている。同時に、建物端部に配された石積壁は、暖炉という機能面はもとより、内外空間や立面構成の点からも重要なものであると思わ

れるにも関わらず、素材感の消された抽象的なものとなっている。実施作品では、ルーバー状になっている庇も、ルーバーとしての表現はなく、建築の主要な外殻線、すなわち立面の構成要素であるヴォリュームの関係性を本パースでは重視していたことがみてとれる。このことは、あえて白黒を反転させ、線画として抽象度を高めていることとも通ずるものと考えられる。

同様のことは、同じく外観を、白黒反転で示したパース #16e-3にもみてとれよう。高木の樹木の強調はあるものの、通常では、立面パースの主たる要素となる架構や屋根の開口、周辺環境といった要素が消去され、立面構成の主要要素である、壁や本作品を特徴付ける半透明パ

表4 パースと竣工写真の比較表

作品	性質	建築的要素				生活環境的要素						周辺環境的要素				備考				
		実体/外観	架構		床	壁	屋根/天井	人物	設備		植栽(樹木等)	生活器具	地形	山	樹木		道路/遊歩	塀	塙	
			注	ガラス(開口)					ガラス/屋根	エレベーター										キッチン
CSH#16e	#16e-1	○ 外			×	×	▲	△						×						室内表現無し
	#16e-2	○ 内	×	×			▲	△												
	#16e-3	○ 外	×	×			△	△							○					
	#16e-4	○ 内	×	×			△	△												

○強調(高村表現や大きな構図等による強調) △抽象化(形状の変化や素材感や自地表現が無い等) ×消失(表現されていない) 一記が強調されていない) ▲その他の変更(計画によって変更された箇所)

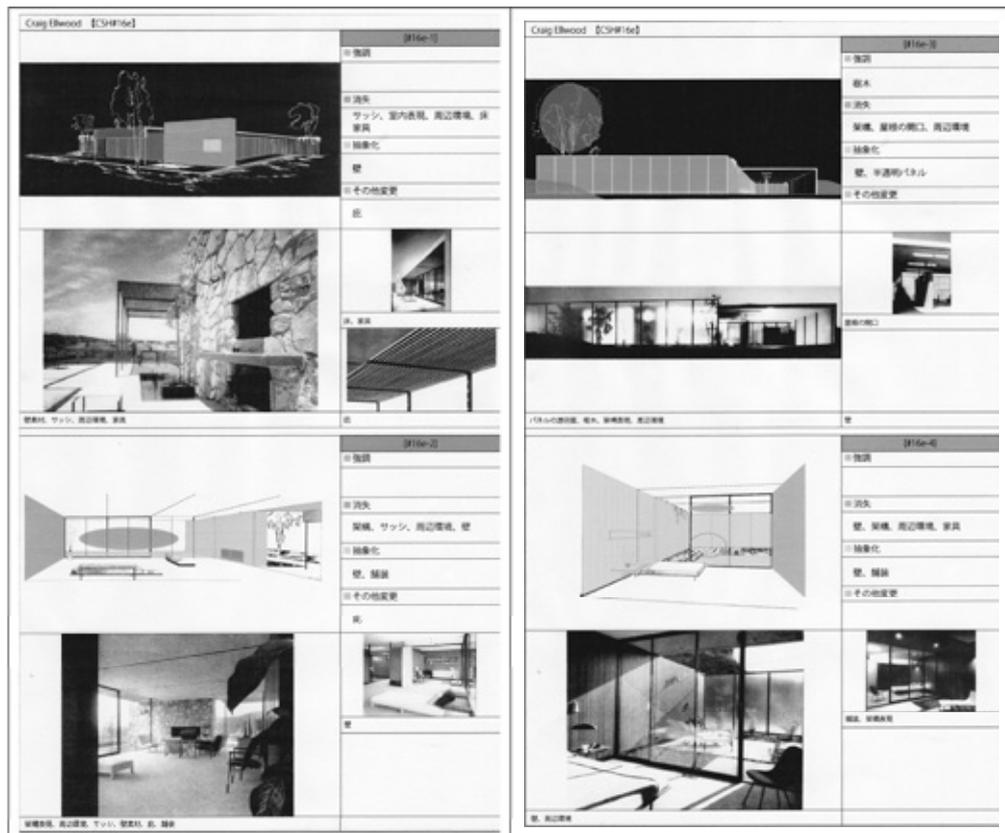


図2 パースと竣工写真の比較分析図

ネルも、その素材感が抽象化されている。ここでも、建築の主要な外郭線が際立たされており、こうしたことから、エルウッドが、立面構成におけるヴォリュームの関係性を重視し、それを最も的確に示すために、消去や抽象化といった操作を行っていたことが認められよう。

ついで、内部空間を表現した2枚のパース #16e-2, #16e-4 について検討を加える。両者ともに強調されている要素はなく、両者ともに消去されている要素が、架構やサッシ、周辺環境でみられ、さらに #16e-2 では壁、#16e-4 では家具が消去されるものがあり、両者とも石積みの壁、木製の壁や舗装などの素材感が抽象化されている。外観パースとは異なり白黒反転はしていないものの、こうした消去や抽象化は、実現化しようとする空間そのものを予めパースとして表現しようとするのではなく、あくまで、自身の室内空間の構成および構成要素間の関係に絞ったものとして検討しているものと考えてよかろう。すなわちエルウッドのパースからは、その外郭線がもたらすヴォリュームの交差を示そうとする意図がみとれるのである。

ついで要素ごとに、その傾向を検討する。「建築的要素」で顕著なのは、他の CSHP の建築家のパースでは主たる要素として現れた建築的要素が限定され、しかもその大部分が、抽象化や消失、その他の変更となっている点である。具体的には、「架構」や「サッシ」、「家具」など、エルウッドの建築を一般的に特徴付けているとされる、これらの要素が表現されていない。同時に、「目地・ペープ」や「壁／パネル」など、エルウッドの建築では比較的素材感を出さざる事を行うことが多い、これらの要素についても、基本的に抽象化させるか消失させている。これらのことは、先の個別のパースの項でも検討した様に、建築の外郭線がもたらす空間構成要素のヴォリュームの交差の表現に軸足をおいていたこととして理解ができよう。「生活環境的要素」にも同様に傾向がより顕著に現れる。まず対象とする要素自身が少なく、さらに、生活感を最も表現するであろう「家具」は消失され、生活の場の象徴である「暖炉」や添景として生活を彩る「植栽」らには変更が加えられているのである。これほど徹底した排除には、エルウッドの空間構成主義ともいえる側面としてみなせよう。「周辺環境的要素」も同様の傾向をとる。様々な自然環境の中に置かれる住宅にあっても、「樹木」が1パースで強調されていることが認められる程度で、「周辺地形」や「眺望／遠景」については、分析対象の全パースで表現されていない。

以上の検討をまとめると、エルウッドの空間構成主義的な様相が、下記のように整理されよう。

エルウッドは、通常、彼の建築表現の主軸とみられてきた、「架構」や「ガラス」「サッシ」といった「線」材には消失や変更を加え、表現しないようにし、逆に「壁／パネル」といった「面」材には「面」としての特徴をより強調すべく、素材感を消す抽象化の作業が行われてい

る。そうした作業の帰結として、エルウッドは、建築の外郭線がもたらす空間構成要素のヴォリュームと面である壁の交差を表現することを、彼のパースにおける空間像としていたことが認められよう。同時に、表現要素が減らされた建築的表現からさらに、生活環境的表現や、周辺環境的表現を消失させることにより、建築そのものをさらに際立たせるため採用したパース表現であり、それこそ彼の空間像であるといえよう。こうした点は、前稿で検討したソリアノの、架構表現を中心に自身の空間像としていた点とは大きく異なるものであり、他のCSHPの建築家との比較検討により、より詳細に各建築家の特性と差異が定位されよう。

4. 3 パースの構図

本節では分析図(図3)をもとに、エルウッドのパース表現の構図を分析し、その表現の意図を明らかにする。前述の通りパース表現における構図には、視点の中心や方向、高さの操作に、建築家の空間像への強い意思が関与している。これらの項目ごとの結果を表5に示す。

4枚のパースで、2消点のものが2枚、1消点のものが2枚で、2消点のものと1消点のものが、それぞれ1枚ずつ外部を透視したものと内部から外部を透視したものとなり、4枚のパースの消点・視点の方向がすべて異なる構図を採用していることに、まず特徴をみいだせよう。限定されたパースの枚数で、様々な表現方法をとるエルウッドは、その対象とする空間においても、外構(#16e-1)、リビング(#16e-2)、アプローチ(#16e-3)、そしてベッドルーム(#16e-4)と空間を網羅的に抽出している。ついで視点の中心は#16e-1を除き、サッシもしくは柱上になされ、それらが、前節で述べたように表現の上では弱められ

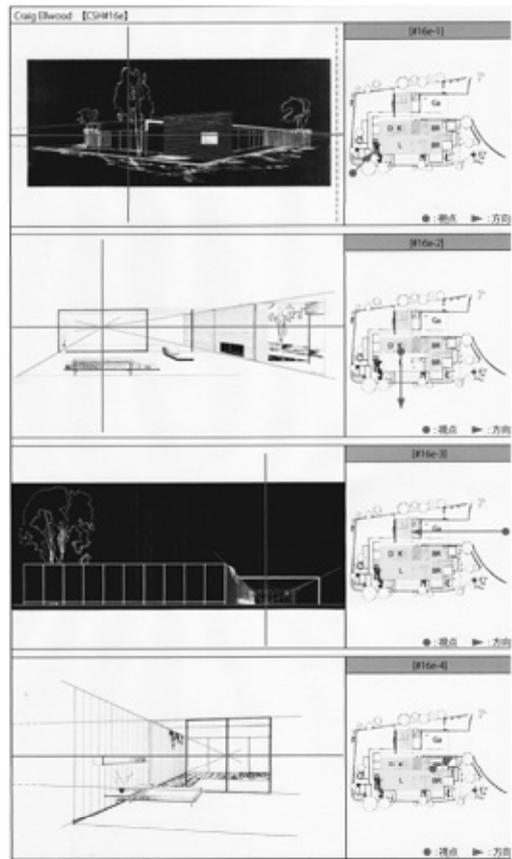


図3 パースの構図に関する分析図

表5 パースの構図に関する分析結果

作品	消点数	視点方向	視点は		備考
			消点	空間	
CSHP16a	#16e-1	2 外→外	窓	外構	目録
	#16e-2	1 内→外	サッシ	リビング	目録
	#16e-3	1 外→外	柱上	アプローチ	地面
	#16e-4	2 内→外	サッシ	ベッドルーム	目録

ていようとも、空間的な中心として捉えていることを示している。また視点の高さは、遠景からの見通しが可能な #16e-3 のみを地面とし、残りは目線の高さに設定されており、これも、あくまで構図としては自然なものとし、逆に表現する内容の「抽象化」や「消失」、「変形」等の操作を行い、彼の空間構成を表現しようという意図がみとれるものとなっている。

5. 小結

本稿では、エルウッドの思想、パース、実際の空間、その3相の下に、すなわちプロセスとしての建築空間の生成の下に、彼の特質をみる着想のもと、彼のCSH作品について、彼の言説と実現した空間のおおのの分析を、パース表現の分析との相互関係のもとに、その特質を空間像として明らかにしてきた。以下に、本稿で明らかになった点を概括する。

言説においては、壁やパネルへの意識が、プライバシーのそれ同様に高く、これらが相補的に、壁やパネルにより、プライバシーが保持されるようにした、あるいはそれが保持された中で、空間を、特に工業生産品からなる壁やパネルをもちいて、内部空間から外部空間へと伸張させようとしていることがみとれる。同時に、壁については、内外を連続する壁に、その構成の強調のために独自の表現を施し、他の要素は排除することや、パネルの表現では、それがプライバシーの確保を背景とすることを表現するため、モジュール化されたパネルの立面的表現をとる。このモジュール化された半透明プラスチック・パネルの使用とそのパース等での強調から、彼が、本作品群がCSHPの一環であることにも意を払っていることが認められる。そして、エルウッドのパースに顕著なのが、建築の主要な空間構成要素以外の、家具等の生活環境を示すものや、周辺環境に関わる要素の排斥である。これは、先の言説で検討したことに、彼が空間構成の有り様に特に意を払い、それを彼の空間像として提示しようとしていたことを示すものといえよう。

パースと写真との比較から、建築の構成要素、なかでも壁の素材を表現することにより、内外空間の連続性を示し、さらに、輪郭線の消去による抽象化の強化、また内外空間の連続性に関係しない、空間構成と無関係なものは消去されるなど、言説からも伺えた内外の連続する壁の存在を極めて重視していることが、ここでも認められる。それは同時に、言説でも示された生活環境や周辺環境への意識の低さにも確認することが可能であろう。すなわち、エルウッドは、内外を連続させる壁を強調し、その先にある外部空間を消失させることで、抽象的な空間描写により、壁が拡張していく空間の無限性を示すのである。さらに構図の検討からも同様の傾向が明らかとなる。このようにここで、内部空間から外部空間への連続性を表現する独立壁を中心とした空間構成の重視という、エルウッドの極めて明確な空間像が確認された。

今後の課題は、まず、CSHPの建築作品への同様の検討から、エルウッドの位置づけはも

とより、CSHPの建築作品における空間像の全貌を把握することである。その上でCSHPそのものを、近代における規格化や普遍性と建築のあり方という視点で位置づける検討や、A&Aに掲載されたパース表現への、ミースの影響などを検討する必要もあろう。

近代という時代が用意した建築における規格化は、ル・コルビュジエやグロピウスという近代建築の巨匠をはじめ、フラークブルーヴェ、そしてCSHPに参画した建築家などによって、広くその可能性が追求された。規格化が根源的に抱える画一化という課題を批判することは容易であろう。しかし、既報でのソリアノの空間像と、エルウッドのそれとには、CSHという親近性があるにも関わらず大きな差異が、すなわち彼らの建築思想の差異が、空間像の表象性の中に認められるのである。建築における規格化は、これも近代がもたらした資本主義社会の中、今も継承され不可避な課題である。こうした課題への対応の初端を、規格化・普遍化を基調としながら、個性ある気候やライフスタイル、そしてデザインを重視した、エルウッドを初めとするCSHPに参画した建築家の作品に、すなわち彼らの空間像にみえてとることが可能なのである。今後も検討を行う予定である、イームズやコーニック、キリングワース等の空間像を総合的に把握し、彼らの差異だけでなく同質性も把握することにより、アメリカの戦後の規格化住宅としての意義にとどまらず、広く近代建築史におけるそれらの位置づけを企図している。

註

- 1 Esther McCoy; *Case Study Houses 1945-1962*, Hennessey & Ingalls, Los Angeles, 1962. Catharine Smith ed.; *Blueprint for Modern Living*, MIT Press, Cambridge, 1989. 岸和郎・植田実監修、『ケース・スタディ・ハウス』、住まいの図書館出版局、1997。には上記書に含まれる論考の邦訳をはじめ、McCoyや建築家・施主へのインタビューが収められている。Barbara Goldstein; *Arts and Architecture: The Entenza Years*, MIT Press, Cambridge, 1990.

- 2 第1報は、デザイン理論61, pp.49-62, 2012であるが、第1報で示した本研究の意義を概括する。

規格化を基調としながらも、「新しい」ライフスタイルとその空間という空間像として提示する試みに、ケース・スタディ・ハウス・プログラムがある。その作品群に示された特徴は、南カリフォルニア特有の住宅の仕様を満たし、良好な住環境を形成すること、一般の人々が手に入れる事ができる現実的な基準に即したものであること、個々の住宅は複製可能であるとし、製造業者との協力を約束すること、大多数のアメリカ人を対象に、戦後の生活を示す新しいデザインであること、手に入れられる最良の材料を最良の方法で使用する事、一定期間一般に公開すること、作品はすべて「アーツ・アンド・アーキテクチュア」誌に掲載することなどであった(傍点、筆者)。それは建築家のみならず、施主や建築部材メーカーを含む広い範囲を対象に行った、「新しい」ライフスタイルの啓蒙

であり、理想的な空間像を示すことによる、建築雑誌が束ねるメディア・ミックスの先駆けとしても捉えられる。1945年から20余年にわたる CSHP において36件が提案され25件が建設された。

- 3 マッコイも「ルーズなプログラムであった」と記すように、CSH#16, #17, #18等、番号に重複が見られるものもあるため。エルウッド作品には、判別のため番号の次にeを付す。
- 4 エルウッドに関しては以下の2冊の評伝と2冊の作品集がまとまりあるものである。Esther McCoy; *Craig Ellwood*, Hennessy and Ingalls, 1968., 2G, *Craig Ellwood 15 houses*, 1994., Neil Jackson; *California Modern: The Architecture of Craig Ellwood*, Princeton Arch. Press., 2002., Jail Jackson; *Craig Ellwood*, Laurence King Pub, 2002.
- 5 我が国における既往研究として、筆者らは、CSH 全作品の空間構成の類型的把握をはじめ、ノイトラ、イームズ、ソリアノ、コーニック、エルウッド、キリングワースの建築作品群に関する建築家別の空間構成の研究など、約15年にわたり継続的に研究発表を行ってきた。また、那須は、CSH の言説を概括し、内外空間の構成に着目した研究を行っている。那須聖、八木幸二ほか、「ケース・スタディ・ハウス・プログラム」にみられる理想住宅、日本建築学会計画系論文集, No. 508, pp. 249-255, 1998.06。山中も CSH における空間構成の類型的な分析を行っている。主なものに、山中章江、川向正人、ケース・スタディ・ハウスにおける「場」の生成、日本建築学会計画系論文集, No. 614, pp. 253-260, 2007.04。山中章江、川向正人、ケース・スタディ・ハウス・プログラムにおける「空間的広がり」、日本建築学会計画系論文集, No. 604, pp. 203-210, 2006.06。がある。さらに宮下はコーニックを中心に CSH の個別作品の分析を行っている。宮下智裕、Case Study House に関する研究 CSH#16-開口部による外部、内部空間のつながり、日本建築学会東海支部研究報告集, No. 68, pp. 585-588, 1998.02。
- 6 筆者の調べた限り、国内に A&A 全巻を収蔵しているところがなかったため、1997年7月におこなった南カリフォルニア大学での資料収集により、約30年にわたり発刊された A&A 誌を全て複写し、本研究の資料としている。
- 7 奥山は建築家の言説に関する多数の論考を示しているが、ここでは2編を示す。奥山信一、坂本一成ほか：建築家の言説にみられる現代住宅作品の空間モデル、建築家の創作論に関する研究、日本建築学会計画系論文集, No. 456, pp. 123-134, 1994.02。奥山信一、坂本一成：戦後「新建築」誌における建築家の創作論：建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデル、日本建築学会計画系論文集, no. 477, pp. 101-108, 1995.11。
- 8 主題の項目をその水準とともに構造化する過程では、多数にわたる項目を定性的なものとして、その水準や関係性を検討し、それらの項目並びに水準と関係性の抽出に当たっては、筆者を含む複数人による複数回の検討を重ね、可能な限り恣意性を排除するように努めた。
- 9 エルウッドの言説は A&A の以下の号・頁に収められたものである。以下、記載順に示す。#16e-21 は、Arts and Architecture, 1956.03, p. 23, #18e-20は同誌, 1957.04, p. 20, #e18-13は同誌, 1957.04, p. 18, #18e-11は同誌, 1957.04, p. 18, #18e-19は同誌, 1957.04, p. 19, #18e-16は同誌, 1957.04, p. 18。#17e-27は同誌, 1955.03, p. 19。

図版出展（特記なきものは筆者作成）

図1：出典を表1内に示した。

